

パルミユラ發掘の漢代絹布について

小 玉 新 次 郎

一、序

二、パルミユラ

三、パルミユラ發掘の絹布

一 序

前世紀の末年に始まり、特に今世紀の初頭以來、本邦並びにヨーロッパ諸國の學術探險隊は、中央アジアにしばしば發掘を試み、西域・近東に於いて沙中から幾多貴重な資料を獲得した。中でも古く中國の特産であつた絹織物の發見は、西域地方がいわゆる絹街道シルクロードであつたことを立證して誠に意義深い。まずイギリスのスタイン卿が樓蘭地方で最初にこれを發見し、ついでロシアのコズロフ氏等の一隊が外蒙古のノイン・ウラの古墳群で絹織物を見出している。

これらは、朝鮮半島平壤附近の漢樂浪郡時代の古墓群や山西省大同に近い陽高古墳群等中國古代文化の波及した地方から出土した絹布と共に、何れも漢時代の遺品であると考えられている。

ヘルマンがその著「古代絹街道」第一章第一節において述べているように、

「古代交易史上絹程大きな役割を果たした商品は他にない。それまで互に全く知られなかつた二つの文化圏が絹によつてとりもたれた。二つの文化圏とは中國文化とギリシア・ローマ文化とのそれであつて、絹の故郷、中國がこの接

觸を導來した。しかし、それも紀元前二世紀の末葉になつてやつとそこに到達したのである⁽¹⁾。絹が中央アジアを通じて西方に達するのに特に時間を要したのは、その道の長さと困難さのためというよりは、むしろ隣にいた草原民族（就中匈奴即ちフンヌ）の挑戰態度と通商妨害の所爲であつた。故に紀元前三世紀の末、萬里の長城が構築されて彼等の侵入が漸次停止すると、中國の國力は徐々に恢復し、特に前漢武帝（前一四〇—八七年）の治下には内外交易に生々とした繁榮が見られるようになった。一方それに似た都合の好い状態が西方に最も近い文化圏、即ちヤクザルテス河上流とオクザス河の平野と更にそれより西のパルティアに時を同じくして生じていた。それらの諸國にあつては、アレクサンダー大王の時代は過ぎ去つたとはいへ、未だギリシアの商業精神が盛んであつた。

又當時「中國商品の一部は印度を經由して海上からも來たらし⁽²⁾」。東西の交易ルートには陸上と海上との兩者があつたが、中國と東南アジア及びインド諸國との間の交通貿易が活潑になつたのは、やはり前漢武帝の南方經略後のことである。殊に後漢時代は西域を通る陸上ルートが所謂三通三絶の有様で、海上による交易のみが残されて一層頻繁になり、シリア商人も多數このルートを通つて中國へ來ている。それらは一世紀中葉のエリユトゥラー海案内記⁽³⁾や二世紀後半のプトレマイオスの「地理學」等に示されるところである。

一體絹街道（Seidenstrassen = Silkroute）なる名前は、明らかに最初はリヒトホーヘンによつて用ゐられ、しかも紀元前一四四年から紀元後一二七年に至る時期においてオクザス河やヤクザルテス河流域の諸國及び印度と中國との間の絹貿易を媒介した中央アジアの街道に當てられたが、ヘルマンは更に遙か西方シリアまでの隊商路をもこの名稱を以つて呼んだ。その理由は、東方の大帝國との間にこの交易が成立している期間中、シリアは竟に一度も中國と直接關係を保つことはなかつたが、ヒルトの研究の結果始めて明らかになつたように、シリアは中國で出來た生糸の最大の販路ではなかつたにしても、最大の販路の一つではあつたし、これをシリアは主として内アジア及びイランを通

る路によつて獲ていたからである。⁽⁴⁾

以下に紹介する如くパルミユラで漢時代の絹が發掘されたことは、正しくヘルマンのこれらの考察を實物によつて正當づけ實證したものと云えよう。

註(1) Hermann, A., Die alten Seidenstrassen zwischen China und Syrien. Berlin, 1910, p. 1. (安武納譯編「古代絹街道」昭和十九年)

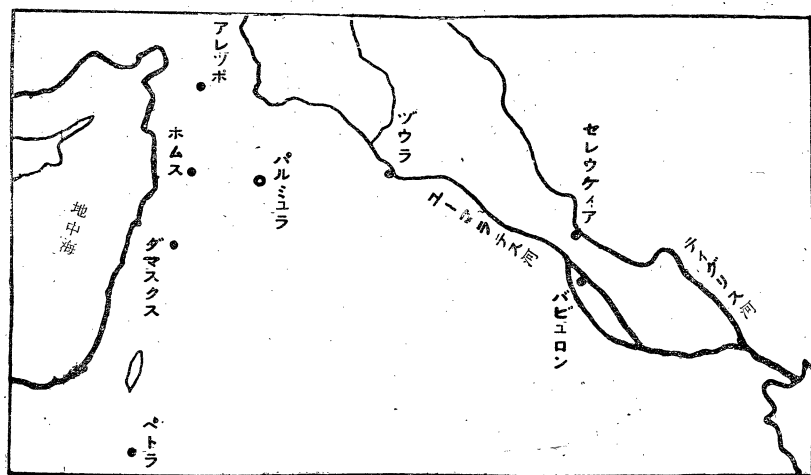
(2) *ibid.*, p. 6.

(3) エリユトウラー海案内記(村川堅太郎譯 昭和二十三年)によれば中國の生糸や絹が印度西岸のパルバリコン、バリガザ、ムジリスの各港から輸出されている(三九、四九、五六節)。但しそれらは中國から陸路西域のバクトラを経て印度西北部にもたらされたものや又チベットを横斷してガンジス河邊に運ばれたものでマレー半島を廻る海路によつたのではない(六四節)。

(4) Hermann, *ibid.*, p. 10.

二 パルミユラ

パルミユラ Palmyra, Palmyre, Palm City (Palm は戰勝木即ち椰子のこと、^{可缺}、セネガルからインダス河流域にわたり有史前よりある)は今では約三百のアラビア人の住む貧弱な町にすぎないが、かつては小アジアの中で最も繁榮した有名な都市の一つであつた。それはフェニキアから、又エジプト、ペトラ、アラビアからペルシアへ通ずる大貿易路上にあり、地中海とユーフラテス河との中間にあるシリア・アラビア沙漠の中で海拔三百九十メートルの所に位置し、ダマスカスの北方二百四十キロ、ユーフラテス河からは三百キロある。駱駝に乗ればユーフラテス河から四日の行程でこゝに達し、ダマスカスから昔は馬で四日を要したと言われるが、現在自動車によると六・七時間、ホムス(エメッサ)から行けば五時間でこの地に達する。



パルミラ發掘の漢代絹布について

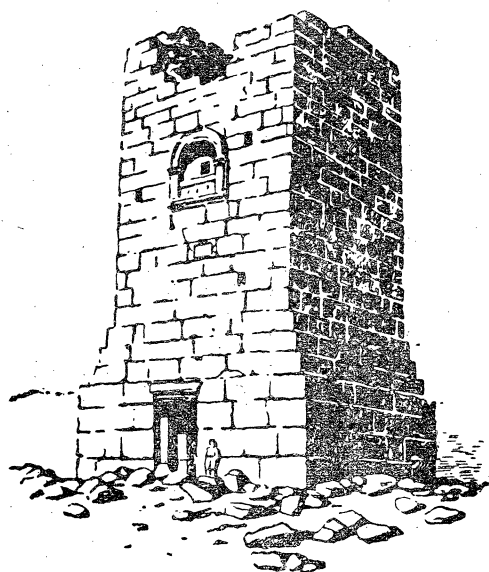
ドルム Dhome の發表にかゝる紀元前十二世紀のアッシリア王
 テイグラト・ピレザ一世時代の一碑文には、⁽¹⁾パルミラを「アムル
 Annuru の國にあるタドモル [Tadmor] と記し、舊約聖書の曆代
 志略下八章四節には「彼（ソロモン）曠野のタデモルを建て、ハマ
 テの諸の府庫邑を建つ」とある。列王紀略上九章十八節にも同様の
 記載がみられる。ソロモンはその町が水を給し、東西の連結點をな
 すことを見出したので、それを要塞で固め、印度の富を自國にもた
 らすための前哨地としたのである。ギリシア・ローマの史籍には
 「パルミラ」の名で知られていたが、當地のアラビア人は今なお
 タドモルと呼び、彼等にとつてソロモンの名は呪文に用いるほどの
 力をもっている。又ローマの歴史家プリニウス・セコンズスはタド
 モルを「殆んど通行不可能な沙漠の真中、且つ強力にして敵對する
 二王國の境界にある」と述べ、共和制の末期ローマ三頭政治執行官
 の一人マルクス・アントニウスはタドモルに着眼し、紀元前三八年そ
 れを攻略せんとして失敗に終つたと言われる。⁽²⁾この町に關するそれ
 以前のことに對して詳細に教える史料は見當らないが、古典時代、
 ギリシア風時代を通じて、それはアラビア語を語りアラム語及びコ
 イネ（ギリシア共通語）を書く人々が住み、町の富と文化はその住

民の中から出た商人や隊商隊長が擔い手となつて繁榮を極める貿易の宿驛であつたにちがいない。最古のバルミユラの碑文は紀元前三二二年のもので、**Bal** 神殿の奉獻に⁽³⁾ついて記してゐる。クック **Cooke** が發表した紀元前九年の碑文⁽⁴⁾によれば、バルミユラではアラビア、アラム、ギリシア、ローマの諸要素が混在し、既にハマ、ホムス、ダマスカス、アレツポからペルシア、イラン、インドへ至る隊商路上、ローマとバルティアの中間に位する最も重要な貿易センターであつた。近年ミシガン大學によつて發掘されたセレウケイアはギリシア風時代にティグリス河畔に建てられ、エール大學によつて發掘された國境要塞、ヅウラ・ユーロポス⁽⁵⁾はマケドニアの他の地方やオリュントスから來た人々によつてユーフラテス河畔に設けられた。しかしユーフラテス河とシリアの沃野・森林との間の沙漠のオアシスに起り、秀れた硫黃溫泉でもあつたバルミユラは、バルティア帝國とローマ帝國から主權の「獨立」と「自由」の保證を受け、交易の前哨地から後には壯麗な都市、そして沙漠地帯において最も強力な生命の源泉者であり破壊者である不戰敗の「太陽神」やその他の東方の神々を崇拜する一大宗教センターへと發展し、遂にローマ帝政時代には、バルミユラはセレウケイア、ヅウラ、ペトラ等よりも大きな隊商センターとなつた。ロストフツェフ教授も、「バルミユラは驚くべき急速な發展を遂げ、シリアにおける最も富裕にして豪華結構を極めた町の一つになつた。それはタドモルの古びて貧弱な神殿が急速に變形したもので、まるで魔法の杖の一振りでも無人の沙漠から現れ出たのではないかと想うほどである。バル神殿は既にアウグスツスやティベリウス時代にはシリアの最も重要な神殿の一つで、この地方のいかなる神殿ともその壯麗さを競い得た⁽⁶⁾」と述べている。かくしてバルミユラは絹、寶石、眞珠、香料等中國、印度、バルティアの商品と珊瑚、寶石、ガラス器その他各種のローマの產物との交易の仲繼都市として榮えたのである。

バルミユラの遺址についての報道を始めてもたらしたのは一六七八年と一六九一年にアレツポから同地を訪れたイ

ギリスの商人達である。その後一六九三年にホフステッド Hofsted 一六九五—九七年にわたつてハリファックス W. Halifax 一七一〇年にスエーデン人ロース C. Loos 等が繪に畫き又簡單な紹介をしたが、パルミユラに關する學術的出版は一七五三年に始めてイギリス人ウッド R. Wood によつてなされた。即ち彼はドウキンズ Dawkins から財政的援助を受けてパルミユラ探險に出發し、“Ruins of Palmyra, otherwise Tadmor in the Desert” (London, 1753-1757) なる大冊を著わした。次に一八八四年ロシアのラザレフ A. Lazarev 公が“Palmyra”の一書を著わしたが、それは一八八二年に彼が発見し現在レニングラードの博物館にあるパルミユラ關稅の長いテキストの研究が中心になつてゐる。同じくロシアのウスペンスキー Uspensky フアルマコフスキー Pharmakovsky の二人はゼノビア Zenobia の墓の壁畫を公けにした。イエルサレムのドミニカン神父ヨウセン Jausen とサヴィニャク Savignac もこの地に探險し、その報告は Ruyue Biblique, XXIX, 1920, pp. 359-419 にみられる。最近ではフランスの金石文學會々員とシリア委任統治領のフランスの役人とからなる一隊が、初めガブリエル A. Gabriel 次いでセリグ H. Sevig 教授の指揮下、一九二五年以來二十年間にわたり、多くの危險を冒してパルミユラの發掘に従事し、廢墟の多くは同教授の指導の下に専門の建築家の手で復原されている。

パルミユラの町は南方を丘陵に限られ西側は「墓場の谷」に接している。ゼノビアの時代にはこの間に周圍十二キロメートルほどの城壁をめぐるしていた。左右に列柱をもち、南東から北西にかけてパルミユラを横斷する約一一〇メートルの古代隊商道路が町の主軸をなし、その道路の南北には等間隔に小路が出て規則正しい街並を劃し劇場その他、公共建築の遺跡がある。この地の建築その他出土品にはギリシア系と西アジアの傳統の存續がみられるが、パルミユラの建築として特色をもつ墳墓には圖(七〇頁)のような塔の形をとるものと他に地下墓室をなすものがある。塔墓は平面正方形に切石を積みあげ、内部は數階に分かれて各階とも壁面にうがつた龕ニッチに棺をおさめ、それらに死



者の像を飾る。また塔の外、入口の上方にバルコニー式の張り出しを設け、主要な死者の横臥像を置く。地下墳墓は地中に設けられた廊と墓室の左右の壁に、上下五段あるいは四段重ねに棺をおさめて死者の像を配置する。パルミユラの彫刻やここに紹介する中國の絹布その他の織物が發見されたのもこれらの墳墓においてである。⁽²⁾

註(1) Ruyue Biblique, XXXIII 1924, 106 ff.

(2) Bellum Civile, V. 9.

(3) Cooke, G. A., A Text Book of North-Semitic Inscriptions. Oxford, 1903, No. 141.

(4) Dura-Europos, Antiquity, 1945, No. 75.

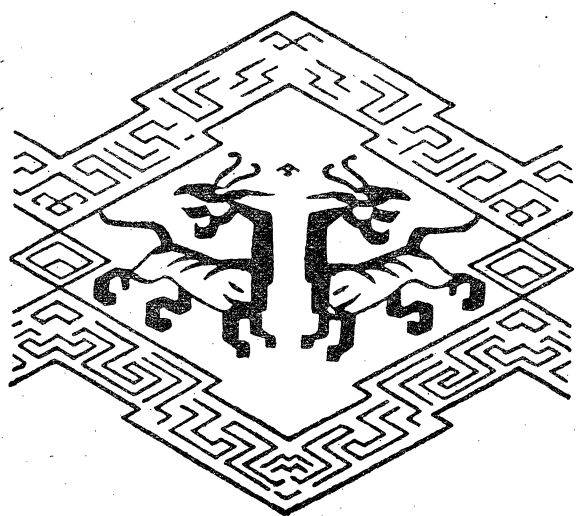
(5) Rostovtzeff, H., Caravan Cities. Oxford, 1932, p. 103.

(6) Robinson, D., & Hoyningen-Huene, Baalbec Palmyra. New York, 1946.

三 パルミユラ發掘の絹布

前述したフランスの發掘隊はパルミユラにおいて絹布その他の織物を見出したが、その報告をフィステル R. Pfister は一九三四・三七・四〇年の三回にわたつて發表してゐる。⁽¹⁾ フィステルはその織物の一つについて化學上の調査をも加えて説明しており、詳細は専門家の手に俟たねばならぬが、こゝでは絹布に關する報告を中心としてその大略を紹介したい。

調査された絹は全部で五十片あり他の織物と共にパルミユラの三つの美しい塔墓、即ち紀元八三年建立の Jamblique の塔、同一〇三年の Elahbel の塔、同じく一世紀のものと思われる四十六番塔から出土したものである。織物の中でも亞麻布は明らかに防腐用として死體を包み、一番よく使い古されて切れに^レなっているが、それでも中には一メートル以上のものがかなりあるのに對し、毛織物や絹布は木乃伊の外部の裝飾用にされ、非常に傷んでいて小さな破裂^{はぎれ}しかない。その上、最近發掘の織物の多くはギリシア風の亞麻布であるが、毛織物の斷片の中には立派な花模様のあるゴブラン織や東洋風の圖形を有するものがある。絹織物には茶、赤、紫で美しく刺繡された從來見られなかつた色々なタイプの中國製の平絹があり、それは又シリアのものが殆んど植物模様であるのと異つて、中國に關係あることを示す幾何學的模様と夢幻的動物模様(圖 a)を畫いており、それらは當時中國にしかなかつた機^{はた}で織られたものと考えられる。殊に紫 pourpre véritable のものが豊富に發見されたことはパルミユラの特徴であつて、「ヅウラ」や「エジプト」にもみられず、或る外衣の如きは後にエジプトやビザンチンにも影響を與えた原型をなしている。織物はこれまでもヅウラで發見されていた。しかしパルミユラの中國絹は近東における最初の發見であり、漢時代に中國から輸入されていたことが初めて西方において證明されたわけである。



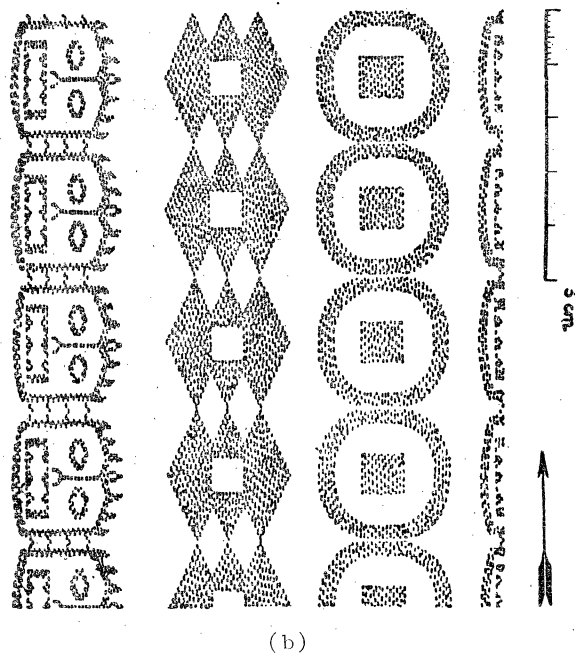
(a)

そこでフィステルがパルミユラの平絹を中國で織られたものと考えるのは主に次の理由による。

一般に糸に撚りがなく、あれば右撚りである。經糸の數が緯糸より多いこと、又後にシリアでも簡単な平絹を織り、それがトルキスタン發見のものに似ているが、中國からは生糸のまゝ運ぶより平絹にして送る方が容易であつたと考えられること、又パルミユラの平絹は樓蘭出土品やヘーデン S. Hedin の旅行によつて知られる中國のそれと同様、非常に緊張して織られており、平絹にみられる假面の並列、三重の菱形、方形を圍む圓模様（圖b）は、その技術と共に何れも西方でなく中國で織られたものと考えられる。糸の太さは十乃至十五ミクロンで、織物の生地が分厚く、彩色の赤は近東の絹にみられる貴族的な赤でなく、茜草 あかね garance 色であることも中國産を意味している。

シリア個有の織機については今日なお資料に乏しいが、パルミユラで發見された絹布の中には例外的に近東製と思われるものがある。しかしパルミユラ時代の中國の絹布は近東の織物技術に對し非常な優秀さを示している。

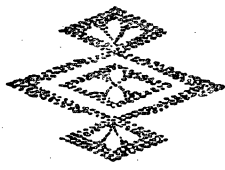
例えば、緯糸に上質の羊毛や木綿を用い經糸には非常に脆くなつた絹を使つている織物がある。ところが經糸にだけ使われている絹は何時も非常に脆い



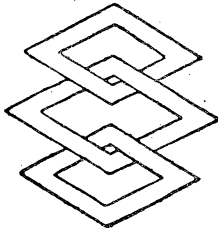
(b)

のに、同じ墓から経緯とも絹から成り、しかも生地強い中國の織物が出ている。これは次のように理解される。古代においてはパルミユラでもエジプトやメソポタミアでも、絹が美しいからというのでなく、單にその地が強いという理由で善く用いられた。即ち西方にもたらされた中國の織物は、輕くて經濟的な布地をつくるためにほどこかれ、その絹の貴重な糸を完全にかくしてしまふ羊毛や木綿とさえ結び合わされたのである。又エリュトッラー海案内記の記載によれば、常に織物としてではなく、生糸や例外的には、ほごした糸が中國から輸入されたことも認めねばならぬ。シリアではこのような中國の絹糸を利用し且つ目につくほどの撚りをつくらずに織るために、止むを得ぬ方法として中國の糸に仕上げる膠水を塗つた。そのために糸が脆くなつたのであり、一方中國人は既に自分達が使用する織機的能力を知つていてそういう誤りを犯さなかつたから、パルミユラで發掘された中國の織物は比較的良好に保たれてゐたものと思われる。

漢時代の中國では模様を作るのに經糸を用い、これに反して西方では緯糸を用いてゐたことは、アンドリュズ Andrews の指摘したところであるが、漢時代の織工が各種の絹織物に適用してゐた織り方は中國獨特のもので、その織機 (le métier à la tire) は主要な構圖を對にする^つことができた。それはパルミユラ没落前までは西方では用いら



(c)



(d)

れておらず、中國が西方より優つた絹布を作つてゐた一つの理由であるとフイステルは言う。この機で模様を織るに當つては常に經の方向において對にされ、その他、菱形の縁どりの傾斜具合など、ノイン・ウラ (圖c)、樓蘭 (圖d)、パルミユラ發掘の絹布は皆同様である。

西方の機械織は、原始的で非常に幅廣い綴織から始まるが、彩色

の羊毛で且つ模様をつくる緯糸が通り易くするため、經糸は非常に緊張して強く撚られる。中國では古い綴織は稀で絹を用いたものは全然ない。従つて絹の綴織とは同一起源ではない。實際、既に述べたように模様を作るのは經糸でそれは殆んど撚られず緯糸もとよりであるから、中國の綴織は綴工の非常な器用さと心抱強さがなくてはとてもできない仕事であつた。

中國の絹は全然撚りがないか、あれば右撚りであるのに反し、西方では一般に左撚りで、殊にエジプトで右撚りのものがあればそれは直ちに外國産と考へ得るが、パルミユラやヅウラではこれら兩市の國際的性格から、そう簡單には言い切れない。

さてノイン・ウラには綾織の絹はなく、樓蘭でもごく僅か出土するだけで、それも唐代のものといわれる。ところがパルミユラ發見の飾り絹はすべて綾織である。そこでフィステルは次のように考へる。トルキスタンやモンゴルの絹は必ず北方中國から來たのに對し、これらは中國の他の方面即ち南方から來たものであらう。又樓蘭の絹布はパルミユラのものよりは更に時代が古く技術は進んでいる。だからパルミユラのものにはもつと原始的な地方即ち南方の産物もあらうと。

シュミッター *Mrs. M. Th. Schmitter* はフィステル説を批判して、パルミユラ發見の絹は全く西方起源であるとし、「織物を飾る趣味（風習）や技術上の方法の發明は絹街道の開かれる前に既に西方にあり、どこかに先進國があつたとしてもそれは中國ではな^く」と述べている。しかしパルミユラ發掘の中國の絹織物のように模様を對にし得る綴織で織るのはパルミユラ時代にシリアやエジプトではできなかったことで、フィステルは依然そこに中國絹の優秀さと共に中國起源を主張するのである。

單に軍事上の役割を果たただけで織物の質もその影響をうけて常用のものしかないヅウラと違い、パルミユラでは

豊富な材料と従前知られていなかった色々な絹織物の模様及び織り方などの型がみられる。これは發掘された三つの墓の富裕さにもよるが、バルミユラが陸上と海上との兩貿易によつて東洋から多くの物産を輸入或いは仲繼していた結果である。三世紀の初葉ではローマの皇帝も絹布を非常な贅澤品と考えていた。しかしシリアではそれより少し前即ち二世紀において絹布がそれほど貴重品でなかつたことは、宮廷とは關係のない地方豪族達の墓室から、絹でできた織物が數多く出てゐることによつて推察できる。

註(1) Pfister, R. Textiles de Palmyre, Paris, I 1934, II 1937, III 1940.

(2) エリュトッラー海案内記 三十九節、六十四節

(3) Ancient Chinese figured Silks excavated by Sir Aurel Stein at ruined sites of Central Asia, Burlington Magazine, 1920, July-Sept.

(4) Ruyue Archéologique, 1939, No. 1.

(5) Pfister, ibid, III 1940.

(6) 漢代の絹織物に關しては

原田淑人 漢代の絹絹

〃 漢代絹の一名「鮮支」に就いて(以上共に「東亞古文化研究」所收 昭和十五年)

〃 漢六朝の服飾(昭和十二年)

梅原未治 支那古代の絹織物に就いて(「東亞考古學概觀」所收 昭和二十二年)

太田英藏 古代中國の機織技術(史林、三十四卷一・二合併號 昭和二十六年 同號には國史・東洋史・西洋史・人文地理・考古學にわたる機業關係者書論文目錄がある)

—關西學院大學文學部助手—